

Kobaimo, Japanese Endemic *Fritillaria*

Laurence Hill

Royal Horticultural Society Shades of Autumn London Show 21-22 October 2014



Kobaimo

Japanese Endemic *Fritillaria*

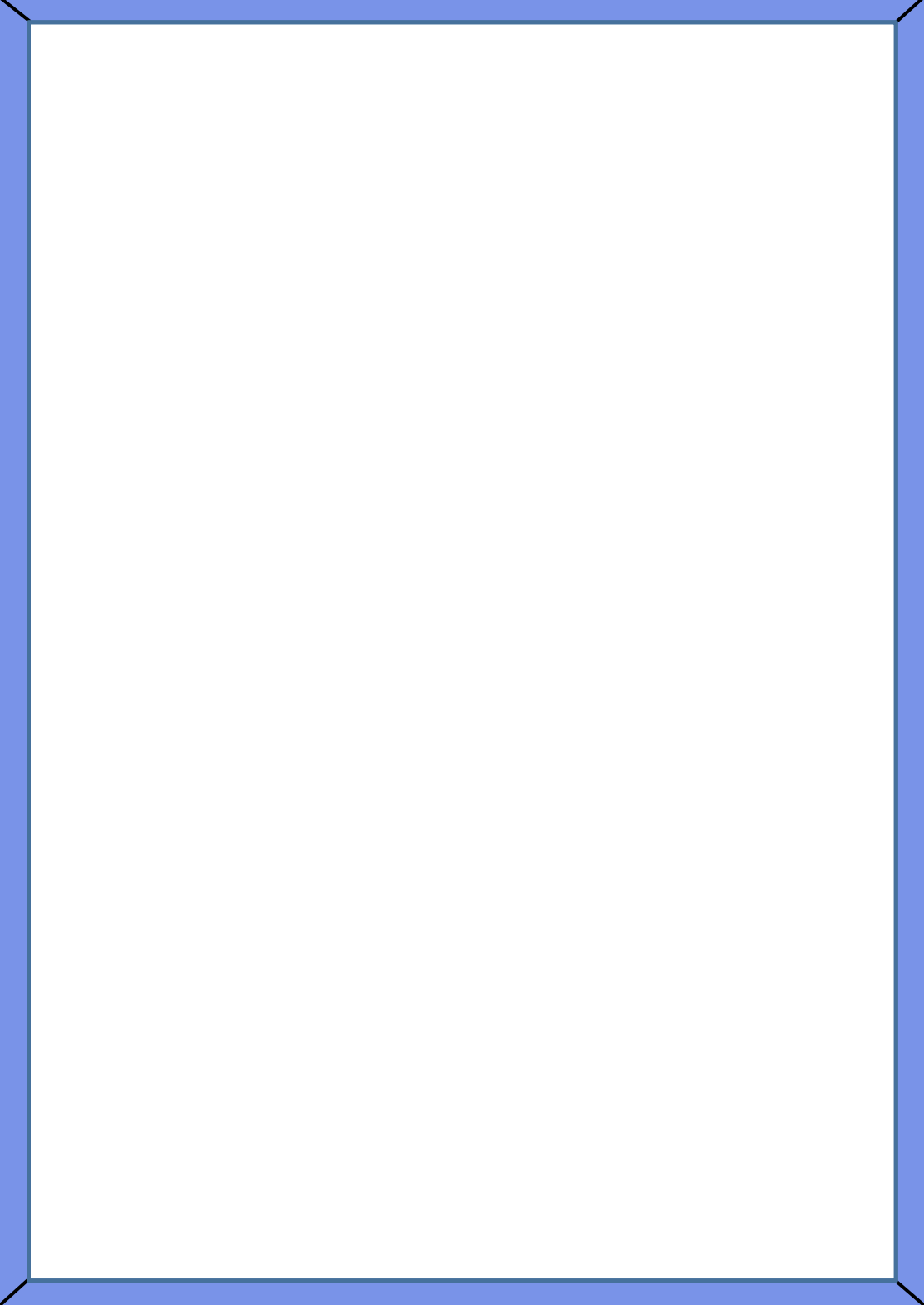
The Japanese word for photography, *shashin* 写真, predates the arrival of the technology in Japan and has its origin in the Edo period (1603-1868) during which time Japan was closed to the outside world. The word roughly translates as 'reflecting/tracing/inscribing truth' and was used by the *Honzo-gaku* or herbal doctors of this period in their intellectual discourse. When referring to a specific plant they combined three elements in their *shashin*. A *shin'ei* or ink transfer print created by pressing ink covered plants onto paper as evidence that they had handled the genuine plant in Japan, an illustration and text. The concept of *shashin* symbolized ideas of fidelity around which the knowledge of *honzo* hinged. It is the relationship of authenticity between the photographic image and original subject in the photograph that brought about the adoption of the word *shashin* for photograph.



Linuma Yukusai

Linuma Yukusai (1783-1865) was an important *Honzo-gaku* of the late-Edo period who at the age of fifty passed his successful business to his brother-in-law to pioneer modern western botany. Between 1856 and 1861 Yukusai published *Somoku-dzusetsu* [an iconography of plants indigenous to cultivated in, or introduced into Nippon] the first modern botanical book in Japan. The twenty volumes were produced in the traditional Japanese style using woodblock printing on rice paper and stab bindings. Yukusai's illustration of kobaimo, コバイモ, an endemic Japanese *Fritillaria* was subsequently described in Europe by Friedrich Miquel from a copy of his book as *Fritillaria japonica*.

These photographs pay tribute to this great pioneer. Printed on rice paper and presented in the style of his original woodblock printed pages, their presentation combines both the original and present day uses of *shashin*.



これらの写真は、江戸時代後期に日本で近代植物学を開拓した飯慾齋沼への敬意を表した作品である。

Laurence Hill

2014年10月21日

単子葉植物

ユリ科

バイモ属

四国
トクシマコバイモ



1.2x

4x



单子葉植物

二
科

个
毛
屬

四国
アワコバイモ



4x

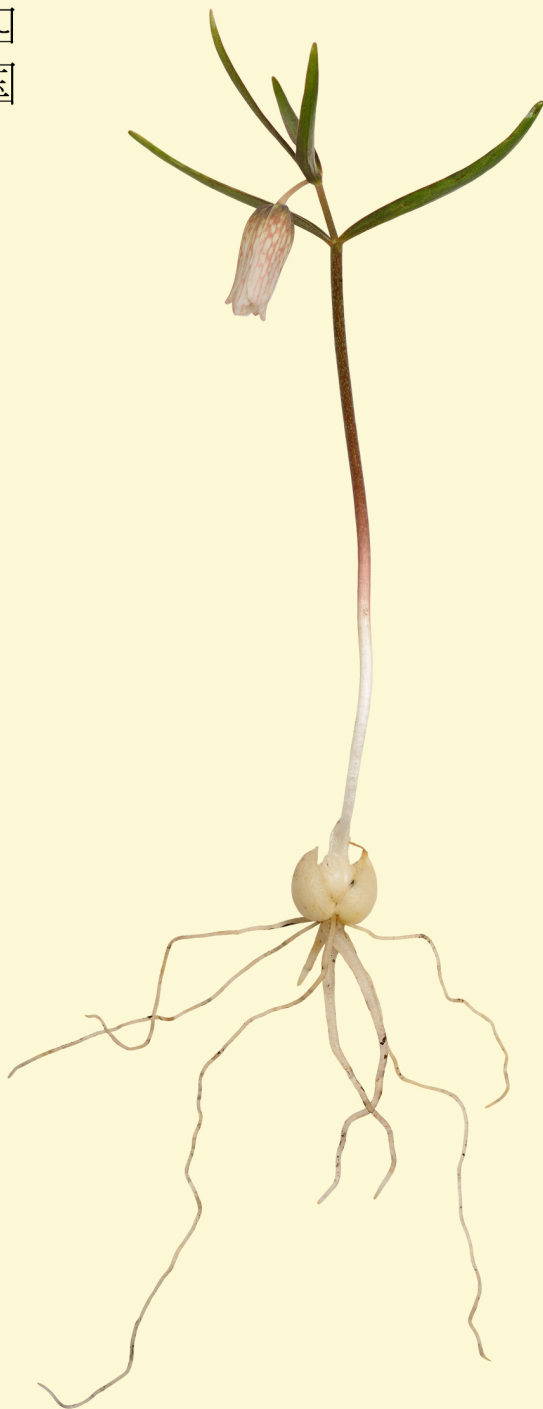


单
子
葉
植
物

二
叉
科

ノ
イ
毛
屬

四国
トサコバイモ



4x



单子葉植物

二
科

八
毛
屬

单子葉直物

ユリ科

ヒゴコバイモ属

九州
ヒゴコバイモ



0.9x

4x



单子
葉
植
物

二
科

八
个
毛
屬

九州
ホソバナコバイモ



4x



单子葉植物

二
科

ノ
毛
屬

本州
ホソバナコバイモ



4x



单
子
葉
植
物

二
叉
科

八
个
毛
屬

単子葉植物

ユリ科

バイモ属

本州
イズモコバイモ



0.5x

3.7x



单
子
葉
植
物

二
目
科

八
个
毛
屬

単子葉植物

ユリ科

バイモ属

本州
コシノコバイモ



0.6x

4x



单子葉植物

二科

八毛屬

本州
ミノコバイモ



4x

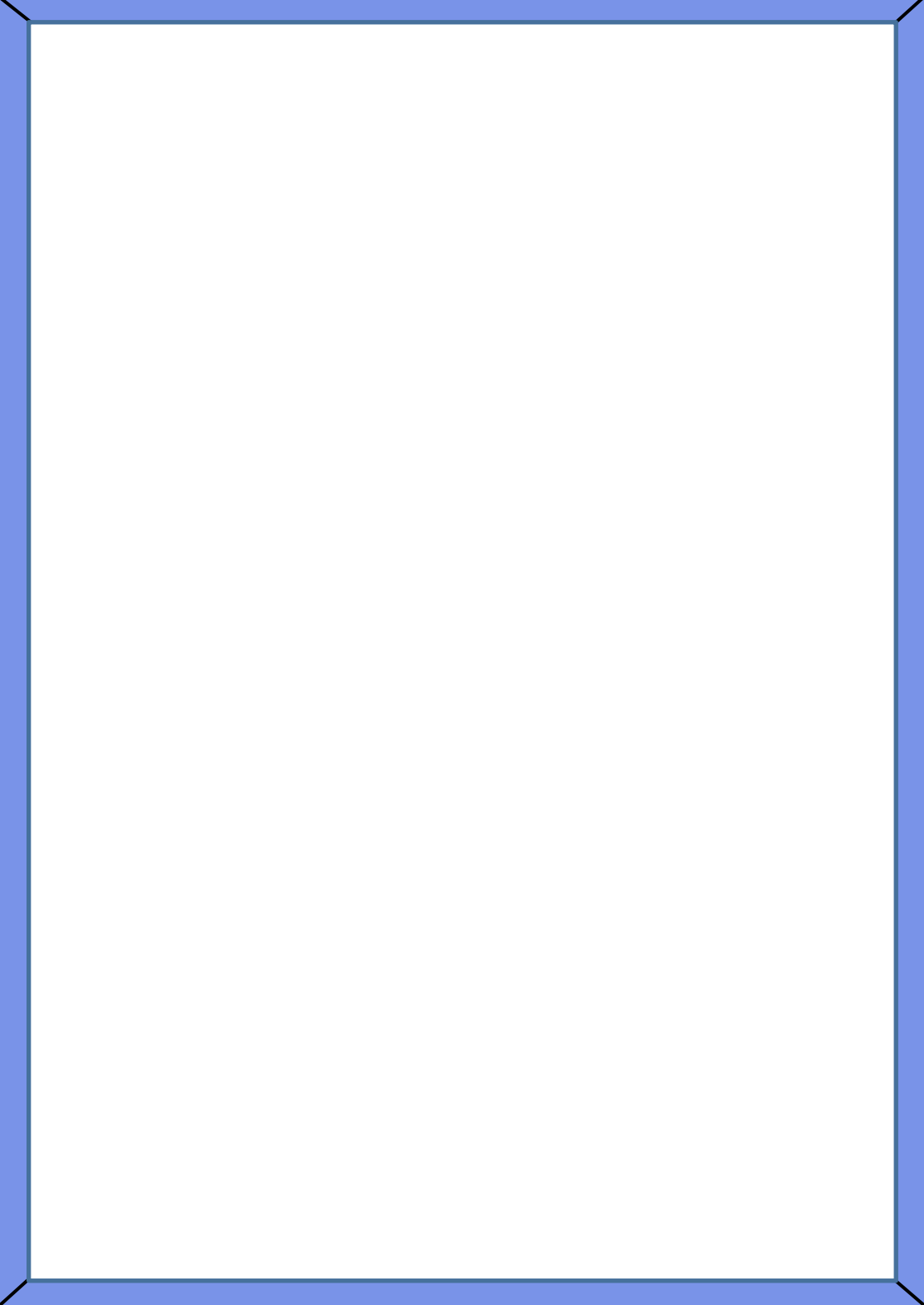


单
子
葉
植
物

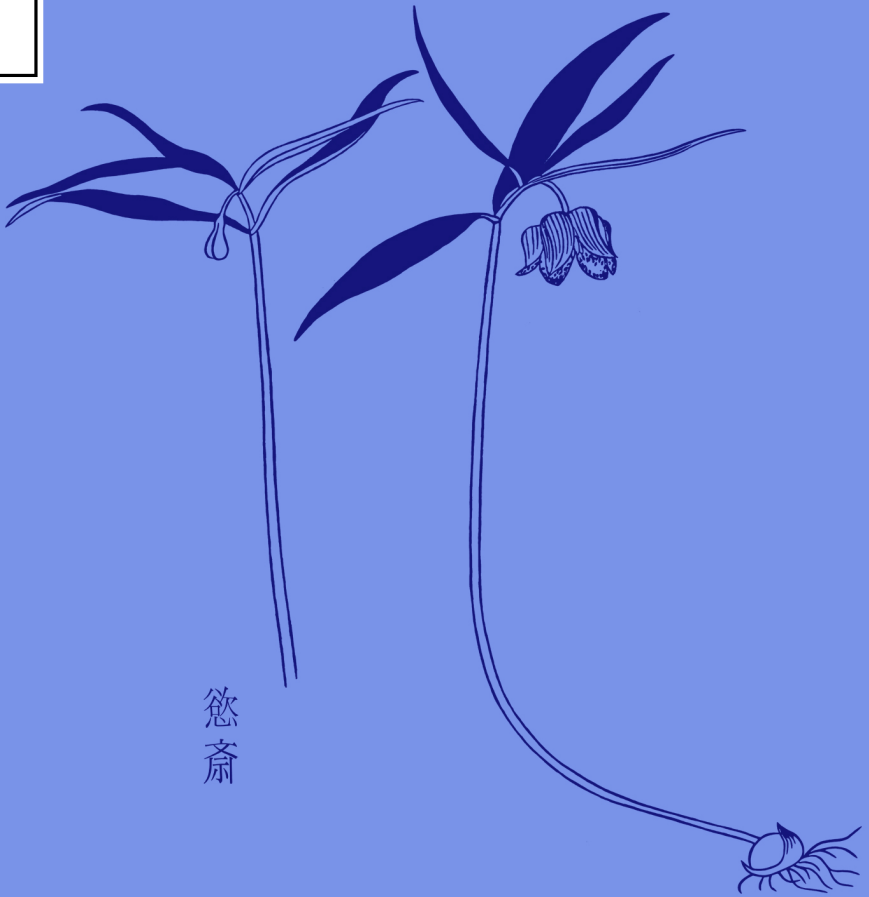
二
叉
科

八
个
毛
屬

コバイモ



コバイモ



愆齋

コバイモ

日本に自生するユリ科の植物

写真という言葉が日本に紹介されたのは、外国から科学技術という概念がもたらされた時期よりも前に遡り、日本が鎖国を実施していた江戸時代(1603年-1868年)になる。当時の本草学者や漢方学者は、学術用語として、写真という言葉で「反映する、写し取る、真実を刻む」という意味で使っていた。彼らが、ある特定の植物について言及する際には、これら3つの要素をふまえて「写真」という行為を実践していた。インクをつけた植物を紙に押しつけるという、真影(実物そっくりに表示すること)あるいは熱転写印刷という手法を用いて、学者たちは、日本で実際に植物を手に取り、観察したという記録をつけていた。読者にある程度の本草に関する知識があることが前提とはなっていたが、写真という概念は忠実性を象徴していたのである。事実、被写体を写し取るという行為に写真という言葉を用いるようになったが、写真という概念を忠実性との関連で論じる際には、写実的な画像が被写体をどこまで正確に映し出すかという、確実性との関連性を考えることになる。



飯沼 慾齋

飯沼慾齋(1783-1865)は、江戸後期の重要な本草学者の一人である。飯沼は、50歳で盛況だった事業を義弟に譲り、日本における西洋近代的な手法を用いた植物研究者の先駆者となった。1856年から1861年にかけて飯沼は、日本に自生している植物、栽培されている植物、外来種の植物を観察分類し、『草木図説』を出版した。これは日本で最初の近代的な植物学書といえる。20巻におよぶ図説は、わら紙に、伝統的な木版印刷の手法を用いて印刷され、和綴じで綴じられた。ヨーロッパでは、フリードリッヒ・ミーケル氏が「ユリ科の日本植物」と題して出回っていた『草木図説』の複写本を参考に、飯沼のコバイモ(日本に自生するユリ科の植物)の挿絵を頻繁に模写した。

今回展示する写真はこの偉大な先駆者、飯慾への敬意を表した作品である。本作品は飯慾に倣い、木版印刷の手法を用いてわら紙に写真を印刷した。今回の作品は、飯慾の「写真」の使い方と現在の「写真」の使い方を組み合わせて表現したものである。